

学位論文の要約

「関係概念」に基づく高等学校古典教育の研究

渡邊 春美

2015年1月23日

I 論文の構成

序 章

第1節 研究の目的

第1項 研究の目的

第2項 研究の意義

第2節 研究の課題と方法

第1項 研究の課題と方法

第2項 論文の概要

第1章 古典教育論の展開―「典型概念」から「関係概念」に基づく古典教育へ―

第1節 「典型概念」に基づく古典教育論

第1項 読解重視の古典教育論

第2項 文学経験重視の古典教育論

第2節 「典型概念」を相対化する古典教育論

第3節 「関係概念」に基づく古典教育論

第1項 関係認識・変革の古典教育論

第2項 「関係概念」に基づく古典教育論

第4節 「典型概念」から「関係概念」への移行―昭和40年代の古典教育論を中心に―

第1項 昭和40年代の「典型概念」に基づく古典教育論

第2項 昭和40年代の「関係概念」に基づく古典教育論

第3項 古典教育論の検討

第5節 「関係概念」に基づく古典教育の可能性

第1項 「関係概念」に基づく古典教育を支える理論状況

第2項 関係概念に基づく古典教育の可能性

第2章 「関係概念」に基づく古典教育の基礎

第1節 「関係概念」に基づく古典教育の目標

第1項 「関係概念」に基づく古典教育の目標観

第2項 「関係概念」に基づく古典教育の目標設定

第2節 古典を読む力の把握

第1項 形象理論に基づく読む力

第2項 読解の三段階法における読む力

第3項 古典の読解力

第4項 文芸学による読む力

第5項 言説論に基づく読む力

第3節 「関係概念」に基づく古典を読む力の措定

第1項 「関係概念」に基づく古典を読む力の観点

第2項 「関係概念」に基づく古典を読む力の措定

- 第4節 「関係概念」に基づく古典教育方法の基底
 - 第1項 「関係概念」に基づく古典教育の構想
 - 第2項 「関係概念」に基づく古典教育方法の基底
- 第5節 内化を求める古典の読みの過程
 - 第1項 読みの過程論
 - 第2項 内化に至る読みの過程
 - 第3項 内化を目指す古典教育の構造

第3章 古典教育史における学習者の定位

- 第1節 戦後古典教育史における学習者の定位
 - 第1項 学習者の定位と古典教育方法の模索
 - 第2項 学習者を主体とする古典教育方法の追究
 - 第3項 学習者を主体とする古典教育の創成
 - 第4項 学習者を主体とする古典教育の展開
- 第2節 古典教育の構造における学習者の定位
 - 第1項 経験主義単元学習における学習者の定位
 - 第2項 主題単元学習における学習者の定位
- 第3節 学習者の主体的学び—問題意識喚起の古典教育
 - 第1項 問題意識への着目動向
 - 第2項 問題意識の意味と機能
 - 第3項 「民族教育としての古典教育」(荒木繁)の授業構造
 - 第4項 問題意識喚起による古典教育の構造

第4章 古典の教材研究と開発・選定・編成

- 第1節 古典教材研究方法史
 - 第1項 戦後における教材研究の展開
 - 第2項 古典教材の研究手法
- 第2節 古典教材化の視点と開発・編成の実際
 - 第1項 先験的価値に基づく古典教材化
 - 第2項 文学史の再構築のための古典教材化
 - 第3項 興味・関心・問題意識を重視した古典教材化
 - 第4項 主題に基づく古典教材化
 - 第5項 世界的視野に基づく古典教材化
- 第3節 「関係概念」に基づく古典教材開発
 - 第1項 教材開発の観点
 - 第2項 教材開発の実際

第5章 古典教育実践の検討—「関係概念」に基づく古典教育の観点から—

- 第1節 問題意識に基づく主題単元学習
 - 第1項 主題単元学習論の追究

- 第2項 主題単元学習の実際
- 第2節 学力育成を目指す古典教育
 - 第1項 国語教育観
 - 第2項 古典教育の実際
- 第3節 文学体験重視の古典単元学習
 - 第1項 古典教育観
 - 第2項 古典教育の実際
- 第4節 複合的対話による古典単元学習
 - 第1項 古典教育観
 - 第2項 古典単元学習の実際
- 第5節 学びの「場」の創造

第6章 「関係概念」に基づく高等学校古典教育の構想

- 第1節 「関係概念」に基づく古典教育の方法
 - 第1項 古典教育観
 - 第2項 高等学校における古典を読む力の系統化
 - 第3項 学習者の主体的学び—問題意識喚起の古典教育
 - 第4項 主題に基づく古典教材の開発・選定・編成
 - 第5項 古典教育の基本モデル
- 第2節 古典教育カリキュラムの構想
- 第3節 第1学年の古典教育の構想
 - 第1項 『伊勢物語』の教材研究
 - 第2項 指導計画
- 第4節 第2学年の古典教育の構想
 - 第1項 『方丈記』・『徒然草』の教材研究
 - 第2項 指導計画
- 第5節 第3学年の古典教育の構想
 - 第1項 『大鏡』の教材研究
 - 第2項 指導計画

参考 教材集

結 章 研究の総括と成果

- 第1節 研究課題の追究
- 第2節 高等学校における古典教育の構想

参考文献

- 1 書籍
- 2 論文

Ⅱ 論文の要旨

序 章—研究の目的

高等学校における古典（古典古文の意）の授業に対して興味・関心を持たない学習者が増加し、古典離れ、古典嫌いに至っているという実態の報告は、戦後の早い時期からなされている。古典の学習が、学習者の生活と精神を相対化し、認識を新たにするとともに、文化の継承と発展に関わることを考えれば、古典教育の改善は、国語教育に携わる者の切実な課題の一つである。この課題に応え、古典教育の現状を根底から改善するためには、古典観そのものをとらえ直すことが必要になってくる。

古典観は、大別すれば、「典型概念」としての古典観と、「関係概念」としての古典観に分けることができる。前者は、古典を先験的に価値を持つ、優れた典型、範型であるとする古典観であり、後者は、古典は、読み手が、読み、意味付け、価値を見出すことによって初めて出現するとする古典観である。

前者の「典型概念」に基づく古典教育は、典型、範型としての古典を学習者に教え与えることになりがちであった。学習者の問題意識によってとらえた創造的な読みは、しばしば恣意的な、幼い読み、誤った読みとして排除された。結果として、読みの内実としての〈古典〉は、多くの学習者によって内化されることなく、遠い存在になっていった。後者の「関係概念」に基づく古典教育では、学習者が、古典との対話を通して、創造的に読み、新たな価値を発見する。学習者が古典と価値ある関係性を築く中で、〈古典〉は学習者に内化され、継承されることになる。

本研究の目的は、「関係概念」としての古典観に基づく古典教育の理論化とともに、高等学校古典教育の改善を図ろうとするところにある。

そのために、古典観（研究課題①）、古典教育観（研究課題②）、学習者の主体的な読みの過程（研究課題③）、教材の開発・選定・編成（研究課題④）、指導法（研究課題⑤）、「関係概念」に基づく古典教育の構想（研究課題⑥）について研究を進めることにした。

本研究の意義は、古典教育の充実、新たな古典教育に基づく古典教育の構想、主体的な学びの創造、古典の読みの過程と内化の解明、古典を創造的に読む技能の把握に認めることができる。

第1章 古典教育論の展開—「典型概念」から「関係概念」に基づく古典教育へ—〈研究課題①〉

増淵恒吉・西尾実・荒木繁・時枝誠記・益田勝実・西郷竹彦の、6人の古典教育論の検討と、昭和40年代の古典教育、および古典観の考察によって「関係概念」としての古典観を古典教育の構想の基礎とした。「関係概念」に基づく古典教育は、学習者と古典との関係性の構築を求める。それゆえに、学習者を学びの主体と位置付け、その問題意識を関係性構築の駆動力とする。それは、問題意識に基づく読みによる古典の形象化と文学体験、およびその意味付け、価値の発見を重んじるものである。このような「関係概念」に基づく古典教育は、古典の内化を促し、〈古典〉の継承発展を確かなものにしていく。

本章で取り上げた古典教育論は、現在も併存している。しかし、史的に見れば、古典観は、「典型概念」としての古典観から、「関係概念」としての古典観に比重が移りつつあると考える。それに従って、古典の読みの指導も、読解的方法から、古典との対話による価値の創造へと向かってきた。その転換は、古典教育論としては、昭和40年代に始まる。

その後、平成年代初期の10年間の「関係概念」に基づく古典教育をめぐる周辺理論の状況として、

読者論の研究、日本語教育における文化学習指導研究、国文学研究、古典（カノン）化の研究、学習理論研究を取り上げた。ここに挙げた研究領域のいずれについても、1970年代～1990年代にかけてパラダイムの転換が生じている。「関係概念」に基づく古典教育も、そのパラダイム転換の一つに位置づけられる。それは、今後の古典教育の可能性を拓くものである。

第2章 「関係概念」に基づく古典教育の基礎〈研究課題②〉

「関係概念」に基づく古典教育は、自立した学習者を求める。そのような学習者を育成するためには、古典を読む力の育成が必要になる。ここでは、古典を読む力を、知識・技能・態度に分けてとらえた。[知識]には、①言語要素、②言語表現、③古典に表れる生活、社会、有職故実、宗教、④古典の書かれた時代背景や時代思潮に関する知識が含まれる。また、[態度]については、①古典への興味・関心、②古典に親しみ、進んで読もうとする態度、③古典を読むことによって、豊かに生きようとする態度を段階的に考えた。[技能]については、意味理解・形象化のための「読解力」と、深層的、総合的かつ創造的な意味づけのための「解釈力」、価値発見のための「批評力」に分けて捉えた。これまで読解力中心であった古典を読む力を意味生成とその批評に広げて措定したものである。

さらに、ユーリア・エンゲストロームの理論によって、「関係概念」に基づく古典教育の構造の解明、同じく、エンゲストロームの「最近接発達領域の段階的構造」によって内化に至る読みの過程の解明を試みた。学習者による内化の過程を、次の通りに考えた。

- ①興味・関心・問題意識に基づき、積極的な読みに向かう〈問題意識〉
- ②読解の段階。場面を形象化し意味づけるが、整合性を得られない。〈感想として表出〉
- ③解釈の段階。整合性のあるモデルを求め、創造的に主題を設定する。〈主題1として表出〉
- ④設定した主題を、他の事象に適応できるように修正し、一般化する。〈主題2として表出〉
- ⑤創造された主題と、〈古典〉を対象に批評を加える。〈批評として表出〉……→〈内化〉

「関係概念」に基づく古典教育の方法として、a. 読むことの観点提示と読む技能の習得、b. 問題意識の喚起と追求、c. 追求の焦点化、d. 形象化と意味付け、e. 主体的学習と交流による追求、f. 内化を見出すことができる。授業はこれらを複合的かつ有機的に取り入れて構成する必要がある。

第3章 古典教育史における学習者の定位〈研究課題③〉

学習者を主体的な読み手として位置付け、古典との対話を通して創造的に読み、〈古典〉を内化する古典教育を追究した。この課題の考察のために、古典教育における学習者の定位を史的に考察した。

学習者の定位は、戦後導入された経験主義に基づく新教育によって始まった。その後の定位の歴史は、古典の学びに必要な主体的学習者の発見と、学習者を生かす指導方法の追究の歴史であった。学習者の豊かな古典の理解・感得を求める、指導者の古典教育の追究は、古典観の史的転換に必然性を持たせたと見える。古典の継承と発展も主体的な学習者の〈古典〉の内化なしにはありえない。主体的な学びの追究は、「典型概念」に基づく古典教育から、「関係概念」に基づく古典教育へと展開していくための基盤ともなったであろう。

また、経験主義単元学習と主題単元学習とを取り立てて、その構造における学習者の位置付けを明らかにした。学習者を位置付ける授業構造なしには、学習者主体の授業にはなりえないことが理解された。さらに、古典との関係性を築き、内化を促進するために、問題意識に着目した。

国語教育界では用いられることの少ない「問題意識」は、近年、他の分野で使われることが増大している概念である。本論では、荒木繁の問題意識喚起の古典教育を再検討し、問題意識を「関係概念」

に基づく古典教育の方法に位置付けた。

荒木繁の問題意識喚起の文学教育は、次のようにまとめることができる。喚起された「問題意識」によって、『万葉集』の鑑賞は、主体的でアクチュアルなものとなり、生徒は、古典としての『万葉集』の文学的な生命を発見するに至る。生徒の学習過程を中心にまとめれば、①問題意識の喚起→②現実への問題意識（現実への批判・人間的生き方の希求）→③創造的読みの積極的 pursuit（A 読解→解釈→B 課題の発見→C 課題の pursuit→D 意味の創成）→④「文学的ないのち」の発見、となる。この①から④に至る過程には、(A)問題発見、(B)問題の本質的把握、(C)積極的 pursuit、(D)問題意識の検討、さらに、(E) pursuit過程の活性化があることが推察される。その結果として、認識の「有意味」として、「文学的ないのち」が発見されるに至る。その発見に至る過程とその発見をとおして、生徒個々に「認識的価値的変革」は引き起こされることになる。ここに、古典文学鑑賞における問題意識喚起の機能の意義を見出すことができる。

第4章 古典の教材研究と開発・選定・編成〈研究課題④〉

教材研究を史的に考察し、「学習者不在の作品研究・文章研究」から、「学習者を介在させた教材研究論」への展開を把握した。その上で、「学習者を介在させた教材研究論」を、学習者の実態に基づく、「目的論的研究」と「方法論的研究」に分けることの有効性について考察した。教材の開発・選定・編成は、学習者を介在させた教材研究論が基礎とされなければならない。

「関係概念」としての古典観に基づくとき、教材は、学習者が主体的に働きかけ、創造的な読み（読解→解釈→批評）によって価値を見出すことをとおして、現代を生き抜く糧を得る可能性を持つものでなければならない。そのためには、学習者にとって価値ある主題に統合される教材開発を、次の教材開発の観点から行うことを考察した。

- (1) 情意的観点—①学習者の興味・関心・問題意識に基づく教材
 - ②古典に親しみ、読み、学ぼうとする態度を育てる教材
- (2) 価値的観点—③認識（感動）を深め、示唆、指針、反省等を得ることのできる教材
 - ④言語に関する認識を深めることのできる教材
- (3) 技能育成的観点—⑤技能を育成することに適切な教材
- (4) 方法論的観点—⑥主体的な学習のための指導形態・指導過程に関わって必要とされる教材

(1)の①は、学習者の興味・関心・問題意識に合わせるというのではない。前もって育て高めた興味・関心・問題意識に基づく教材の開発を求めるのである。(1)の②は、開発される教材によるとともに、(2)(3)(4)の観点からの教材開発による学習内容の充実にも関わって育成される。

(2)の「価値的観点」は、先験的に存在するとする古典の価値に基づく観点ではない。現代と未来を生きるために学ぶべき価値であり、それは、また、学習者の読みによって創造される可能性のある価値の予想に基づく教材開発の観点である。すなわち、(2)の③④は、学習者による学習の可能性を見越した教材開発ということになる。

観点の(1)～(4)は、便宜上、整理したものである。それぞれは、学習実態に応じて、優先順位に差異はあっても、関連しあって教材開発に働くと考えねばならない。本章では、これらの観点に基づく教材開発の事例も取り上げて、論じている。

第5章 古典教育実践の検討—「関係概念」に基づく古典教育の観点から—〈課題研究⑤〉

加藤宏文・片桐啓恵・北川真一郎・牧本千雅子の実践事例を「関係概念」に基づく古典教育の観点

から考察して参考にし、その指導法を把握した。本章では、古典を読む力と発達段階に基づくカリキュラムの作成を行った。また、実践例の考察から、以下の方法を抽出した。

【導入】①学習者の興味・関心の育成、②問題意識の喚起。

【展開】③目標の二重構造化、④主題（テーマ）による学習の統合、⑤指導過程（課題発見→課題解決→学習成果の検討→学習の反省→発展、あるいは、基本→応用→発展）、⑥教材化、⑦活動の導入、⑧主体的学習の支援、⑨古文の史的展開と特質の把握、⑩音読・朗読・群読、⑪古文を読む意義の実感、⑫古文を読む力の育成。

【終結】⑬作品の評価、⑭学習成果の集積。

これらの方法によって、古典教育の構想を行った。

また、実践事例から、古典の創造的読みを発動する「場」についても考察した。その要件として、①問題意識、②対話と多声、③モデル（道具）、④メタ認知を導出した。

第6章 「関係概念」に基づく高等学校古典教育の構想〈研究課題⑥〉

第1章から第5章に至る考察を基に、高等学校1学年から3学年までの古典教育のカリキュラム、読みの能力表を作成した。学年ごとの複数の単元から、次の3つの単元を選び、授業構想を具体化して提示した。

①単元『伊勢物語』一生き方としての「みやび」を問う一（1学年）

②単元「無常の世を生きる一方丈記・徒然草一」（2学年）

③単元「歴史を生きた人々『大鏡』一」（3学年）

この内、②は、次の考えに基づいている。

現代に生きる人々に、阪神大震災、東日本大震災の記憶は、生々しく刻まれている。さらに異常気象による洪水、土砂災害、噴火が重なった。近未来に巨大地震に見舞われるという予測も現実視されている。国家間、民族間、宗教間の対立、紛争が起り、国際秩序は乱れ、その影響は日本にも及んでいる。社会体制、社会秩序にも綻びが顕著になり、生活基盤そのものが不安定になっている。このような中、意識裡、無意識裡に無常観が、人々の中に広がりつつあるのではないであろうか。

本単元では、学習者は、まず、詠嘆的無常観を湛えた「行く河の流れ」に出会い、生々しい、「大地震」を読む。無常の実感は、学習者に生起するであろう。本単元では、次いで『徒然草』によって、中世の無常の時代を生きた兼好のもの見方・感じ方・考え方と対話し、今日に生きる私たちの社会、生活と私たち自身を見つめ、考えることになる。このようなねらいに基づいて単元を構想した。

結 章 研究のまとめ

「関係概念」に基づく古典教育を中心にして、古典観（1章）、古典教育観（2章）、学習者論（3章）、教材開発・編成論（4章）、古典教育方法論（5章）と考究し、古典教育の構想（6章）を行った。本研究には、次の成果が認められる。

1 学習者の主体的学びの促進

学習者の興味・関心・問題意識を喚起し、学習を意欲的・主体的にする。

2 学習者の古典を読む力の育成

学習者自らが主体的な学習を展開するための、学習方法、読む力が設定され、それらを身に付ける学習が行われる。

3 古典教育方法の開発

学習者の主体的な学習活動のための方法の開発がなされた。

ア．個別化、イ．活動化、ウ．協同化、エ．創造化 オ．発展化を要素とする指導方法の開発が行われ、交流によって学びを深めることにつながる。

4 教材の開発・編成による主体的学び

学習者の興味・関心・問題意識を喚起するための、また、育て高めるための教材が開発・編成される。教材は、学習者の実体に応じて選定・開発・編成された。

5 主体的文学体験

学習者の文学体験が重視され、学習者によって創造的な形象化と意味付け・価値づけがなされ、古典との関係性が強められる。

6 創造的読みによる古典の内化

主体的、創造的な読みによって、本質的な古典の継承・発展につながる。

今後は、構想した古典教育を実践に移し、検証し、改善することが求められる。

以上